

2015年
11月10日
火曜日

Timothy Dale Boyle 教授 (キリスト教倫理)

謎めく人間の心 ヤコブの手紙3・2・10

「人間を考える」というテーマを聖書の立場から考えよう。私達人間は被造物の中で、自分の存在の意味を思いめぐらすことのできる唯一の存在者だ。なぜかと言うと、聖書によると、人間だけが「神にかたどって造られている」からだ。要するに、神と似ている、神の性質を反映している存在者だということ。この「神にかたどって造られている」ということに對して全ての人間に平等だ。それぞれの人間には能力などにおいては、平等ではないが、この点においては、皆が平等だ。それゆえに、同じ人権があるのだ。

一方、人間にはこの崇高な面があるにも関わらず、墮落している面もある。今日の聖書の箇所を書いてあるように、「私達は舌で、父である主を賛美し、又、舌で、神にかたどって造られた人間を呪う。同じ口か

ら、賛美と呪いが出てくるのだ。」ここでは、ヤコブは人間の舌を船の舵と比較し、その舵が小さいものであるにも関わらず、大きな船を方向転換させられる。しかし、同時に、舌は破壊的な山火事を引き起こせる小さな火花のようなものであることを書いた。

人間は本当に偉大さと哀れさのコンビネーションだ。この逆説を説明できるのは聖書の世界観だけだ。一方、神にかたどって造られているために、偉大な、崇高な存在者で、それ故に神様の性質と能力を部分的に反映している。しかし、他方では、人間が墮落している。我々は罪深いもので、毎日のニュースで見られる卑劣な行為はそれゆえに起こる。この「罪」という概念はよく誤解されるので、聖書で述べている「罪」はどういう意味か説明する必要がある。

る。聖書では、「罪」は私達の行いよりも、聖なる神の前に立つ私たちの状態を示すのだ。罪を犯すので、自分が罪人となるのではなく、初めから罪人であるからこそ、罪を犯すことがあるということだ。

これは「人間とは何か」という根本的な議論に繋がって行く。人間は本質的に善であることは「性善説」と言い、悪であることは「性悪説」と言う。私なら、人間は本質的に善であることを信じたい。だが、聖書は違うことを教える。実は、両方を教えている。つまり、「神に象って造られた」という面に対して、「性善説」を教えているが、それは「罪」によって、損なわれているので、「性悪説」をも教えている。

様々な思想の中で、人間性は善であることを教えるものは殆ど。人間が起こす悪を説明するのに、人間の

心を狂わせることは、悪い環境や不十分な教育だと言う。だが、良い環境で育てられ、教育のある人がひどい悪を行なった例が数多くある。又、家庭環境がひどく、良い教育を受けていなかったのに、素晴らしい業績を残した例もあるので、明らかに完全な説明ではない。

では、人間が起こす悪はどう説明できるか。人間が偉大さと哀れさの不思議なコンビネーションである事実を説明できるのはこの聖書的世界観だけだ。だから「人間を考える」というテーマを考えるのに、この世の現実合う、人間に對する正しい見方が必要だ。これからの学生生活において、自分のことや社会のあり方などを考えて、自分の人生の方向を決めて行く大事な一時だ。人間に對する正しい見方がその出発点だ。